

研究発表要旨

『イリアス』第 21 巻における河神との戦い

妹尾 優暉

『イリアス』第 21 巻において、親友パトロクロスを殺された怒りに駆り立てられたアキレウスは次々とトロイア勢を打ち倒し、その死体をスカマン드로ス河へ投げ込む。彼はこの行為により、スカマン드로ス河の怒りを買う。河神は「トロイア勢を殺すならせめて平地でやってくれ」と要求し(216-7)、アキレウスはこれに同意しながらも(223)なお河に飛び込み殺戮を続ける。この「論理的不整合」から、「河神との戦い」というエピソードは詩人の“afterthought”であるという想定がなされている(Leaf)。しかし、本エピソードが『イリアス』のメインプロットとの関係で整合性がとれないかは検討の余地がある。

これを踏まえ、本発表ではまず、『イリアス』におけるスカマン드로ス河の描写を整理し、特に第 20 巻から第 21 巻における河神の言及を検討する。その上で、「河神との戦い」は入念に準備されたエピソードであることを確認する。続いてスカマン드로スの怒りが「アキレウスはトロイア勢を河の流れの中で殺し、憐れまなかつた *τοὺς Ἀχλεὺς ἐδάϊζε κατὰ ῥόον οὐδ' ἐλέειπεν*」(147)ゆえに引き起こされることに注目し、「憐れみ」という観点から本エピソードの意義を考察する。『イリアス』の他の多くの場面において「憐れむ」という動詞は仲間内で用いられる語であり、敵に対して用いられない(このことは古注でも指摘されており、ここでの用例は文脈にそぐわないと言われている)。また、第 21 巻で登場する無防備なリュカオンはアキレウスに「憐れんでくれ」と嘆願するが無情にも殺され、さらにアキレウスが殺したアステロパイオスの死体が魚に食べられる様が描かれる。『イリアス』において「おぞましい想像」として語られるにとどまっていた、「死体が動物に食べられるという恐怖」が実現する場面である。これらから、第 21 巻はアキレウスが本来持っていた憐れみを喪失していることを描いていると思われる。事実、アキレウスは過去、リュカオンを殺さず見逃すこともあったし、またアンドロマケの父エエティオンを殺しはしたものの、火葬し、死体を傷つけることはしなかったのである(6.414-6)。

この「敵に対するアキレウスの憐れみ」は、のちにプリアモスの「私を憐んでくれ」(24.503)という嘆願を受け入れることで初めて回復されることとなる。その大団円に至るまで、アキレウスは怒りに支配されており、特に第 22 巻のヘクトルの遺骸を冒瀆することでその残虐性は頂点に達する。この過程において、トロイアとの関わりが深く、トロイア勢の守護神とも言えるスカマン드로ス河という神が、アキレウスの「憐れみのなさ」ゆえに攻撃する本エピソードは、これから描かれるアキレウスの残虐行為を相対的な視座から見ることを促す効果を持つということを指摘したい。

アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』における
メデИАと置き去りにされる女性たち

矢野 愛美

本叙事詩においてメデИАは、イアソンに恋をし、アルゴナウタイを魔術の力で助ける女性として重要な役割を担う。先行研究は、第三歌におけるメデИАの嘆きの描写を分析することや、メデИАが恋をする無垢な乙女としての側面と、恐ろしき魔術に精通した魔女としての側面の両面を持ち合わせていることに着目し、メデИАという人物を捉えることを試みてきた。他方、本発表では、メデИАのみに着目するのではなく、その描写にあたり、詩人は意図的に、本叙事詩内の他の登場人物の行為や比喻表現、その人物が置かれた場面状況などの描写とメデИАのそれを類似させ、相違させているという点から論述する。その論述によって焦点を当てるのは、メデИАに対する直接的な言及がない場面において、他の登場人物たちの描かれ方が、後に登場するメデИАを如何なる人物として演出し、そして本叙事詩では語られない、メデИАとイアソンが辿る破滅の運命を如何に示唆するのかということである。

具体的には、三つのエピソードを取り上げる。まず、第一歌においてイアソンがアルゴ船に乗り込むため故郷を去る場面である。ここではイアソンの母アルキメデをはじめとする祖国の女性たちが、その出発を嘆く様子や、イアソンによって老女イピアスが置き去りにされる様子が描かれている。次に、第一歌でイアソンが出会う、レムノス島のヒュプシピュレとのエピソードである。ヒュプシピュレはメデИАと同様、イアソンに恋する女性として描かれるが、イアソンに置き去りにされる。最後に、第三歌にてイアソンがメデИАとの会話で言及する、アリアドネのエピソードについて論じる。アルキメデ、イピアス、ヒュプシピュレといった女性たちの性質や行動は、メデИАといくつかの点では類似するように描かれるが、しかし相違する点は、その違いを明らかに示すことで、メデИАという人物の性質を浮き彫りにする。そしてこれらのエピソードはいずれも、男性によって置き去りにされる女性を描くという点を共有しているが、彼女たちが置き去りにされること、アリアドネの場合はその結末が隠されることは、本叙事詩では描かれることのない破滅——イアソンは帰国後メデИАを捨て、そしてメデИАはイアソンに復讐すること——をほのめかす。

以上の三つのエピソードに対する分析は、ヘレニズム詩人アポロニオス・ロディオスによる叙事詩『アルゴナウティカ』が、単に一貫性のないエピソードを集めた作品ではないということを示す。聴衆や読者は、本叙事詩を通して各エピソード或いは各登場人物の描かれ方に類似や相違を見出すように導かれている。そしてその類似や相違が、メデИАという人物の性質を演出し、メデИАとイアソンが辿る物語を示唆していくよう、綿密に構成されていることを指摘する。

アリストテレス『形而上学』Γ 卷(第 4 卷)では、「あるものとしてのあるものと、それに自体的に成り立つものどもとを考察する知識」の構想が示される。「自体的に成り立つものども」の例に挙げられるのは、一／多, 同じ／異なる, 等しい／等しくない等々の対立者(τὰ ἀντικείμενα)である。Γ 卷前半部(第 1-2 章)の一つの眼目は、哲学がこれらを対象とする知識として成立しうることの論証にある。アリストテレスによれば、「あるものとしてのあるもの」を扱う哲学がこれらをも対象とする理由は、「ある」と「一」が「原因」と「原理」と同様の仕方で、相互に付随する」(*Met.* Γ2, 1003b23-24)のであり、それゆえこれら「一の諸形相(εἶδη)」に対応する仕方で「あるの諸形相」が存在するからである。本発表が考察するのは、後のラテン・スコラ学における「超越概念 *transcendentia*」論の一起源ともなったこれらの主張が、アリストテレスによる第一哲学のプロジェクトのなかで元来いかなる理論的意義を有していたかということである。

そのためには、Γ 卷の哲学構想と、『形而上学』のいわゆる中心卷(ZHΘ 卷)の直後に位置する I 卷(第 10 卷)の議論との関係をつぶさに見る必要がある。I 卷の主題は「一」(τὸ ἓν)および諸々の対立者であるが、その議論の眼目については、理解の一致を見ない。だが少なくとも、Burnyeat 2001, chap. 6 が要点を明快に整理し、また Centrone (ed.) 2005, Castelli 2018 等のその後の I 卷研究も概ね前提として共有する通り、Γ 卷で提示されたプログラムの具体化が I 卷の課題に含まれており、アリストテレスが「問答家 οἱ διαλεκτικοί」(Γ2, 1004b19)すなわちプラトニストとの対抗関係を強く意識しつつ、I 卷においてカテゴリー横断的な諸概念の哲学的説明を試みているという点は、揺るがないように思われる。ゆえに、Γ 卷前半部で粗描される哲学構想のねらいを理解するには、I 卷とのクロスリファレンスを正確に押さえる必要がある。他方、両卷の関係は、中心卷のウーシア論、就中 Z 卷 13 章以降のプラトン批判に媒介されている。そしてこのことも、問答家の過ちがウーシアの認識の欠如にあると主張する(1004b9-10)Γ 卷において、すでに予告されている。

本発表の課題は、この『形而上学』Γ-Z-I 卷の論脈の発掘を通じて、Γ 卷における普遍知の構想を明確化するとともに、それがいかなる意味でプラトニズムへの対抗プログラムたりえているのかを示すことである。

『オデュッセイア』22. 330-380 における助命嘆願 ——次代の家の主人たるテーレマコス——

木和田 安寿

本報告では『オデュッセイア』における求婚者殺害(22. 1-389)の締めくくり召使が行う助命嘆願(22. 330-380)が、オデュッセウスの息子であるテーレマコスの、家の主人として成長する到達点として描かれていることについて論じる。特に、この嘆願の場面に至るまでにテーレマコスが忠実な召使たちと主従の関係を築いたことを前提として、家の主人たりうる者として立場を確立したことが本場面で描かれていることを明らかにする。

助命嘆願の研究には Pedrick(1982)、Gould(2001)、平田(2019)などがあり、それらにおいてホメーロスについても触れられる。しかしながら、それらの研究の焦点は嘆願の所作にあり、主に『イーリアス』の嘆願場面について論じられている。『オデュッセイア』第 22 歌において召使の行う助命嘆願が物語上で与える影響についての検討を欠いている。その一方でテーレマコスの成長については、Beck(1998)、Heath(2001)は帰国後のテーレマコスが特に求婚者たちに対して態度を硬化させ、家の主人たりうる者として振舞うことを指摘している。しかしこれらも彼に対して用いられたエピテトンを中心に分析しており、彼自身の発言や行動の変化についてはそれほど議論されていない状況である。本報告は、前者の嘆願の研究も踏まえたうえで、テーレマコスの成長を示唆する後者の研究の一環として召使たちによる助命嘆願の場面に注目する。

『オデュッセイア』における求婚者殺害は、オデュッセウスの家の再建や家族の再構築、また王権の復活をもたらすべく行われる。テーレマコスは物語開始時には未熟な少年で、家の主人たりうる者としては認識されていない。しかし帰国後のテーレマコスの立場は、屋敷内で庇護される者であったところから、家の主人たりうる者へと変化する。この立場の変化はペーネロペイアやエウマイオスなど一部の人間との間で形成されたものではなく、むしろ召使や侍女など屋敷に関わる者全体から認識されている。

これらの変化の中で、召使 2 人による助命嘆願は、テーレマコスが自身の立場を求婚者殺害に至るまでに確立できたために成功した。二人の召使、特にメドーンはテーレマコスによるとりなしの効果に期待して嘆願を行う。テーレマコスこそが彼らの忠誠を保証し助命する者であり、それは彼が次代の家の主人であるため可能なのだという認識の表れである。さらに現在の家の主人であるオデュッセウスも、求婚者殺害に至るまでのテーレマコスを見て、召使たちの助命の判断を行う資格を持つ者として彼が立場を確立したことを認めている。

このように、召使たちの助命嘆願は、物語開始時には庇護されるべき子供の立場にあったテーレマコスが家の主人たりうる者という立場を確立し、これを屋敷内の上位の者も下位の者も承認したことが宣言される場面として機能している。